【25】

氏　名（本　籍）	佐竹真次（山形県）
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博甲第609号
学位授与年月日	平成元年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	心身障害学研究科
学位論文題目	自閉症児における語用論的伝達機能に関する研究 ――行動論的アプローチ――

主　査	筑波大学教授	教育学博士	小林重雄
副　査	筑波大学教授	教育学博士	内須川洸
副　査	筑波大学教授	医学博士	長畑正道
副　査	筑波大学助教授		中野良顯
副　査	筑波大学教授	教育学博士	福沢周亮
副　査	筑波大学教授	教育学博士	片岡暁夫

論　文　の　要　旨

本論文はA4版 230頁（1頁 980字）で，以下の7章より成っている

第1章　自閉症と言語障害

第1節：自閉症児の症状－自閉症児の症状，原因論，および言語の臨床的特徴について先行研究をまとめた。第2節：自閉症児の言語能力についての言語学的観点からの考察－自閉症児の言語に関する先行研究を音韻論，構文論，意味論，および語用論それぞれについてレビューした。第3節：自閉症児の言語障害についてのまとめ－自閉症児における意味論的能力と語用論的能力の発達遅滞は，音韻論的能力や構文論的能力のそれよりもさらに重篤であることが示唆された。

第2章　言語発達と言語訓練の研究における語用論の背景と展望

第1節：語用論以前－語用論以前の，言語発達・訓練に関する諸理論について概観した。第2節：語用論の発展－1970年代からの語用論の発展過程を概観し，語用論の2つの側面である1)伝達機能と2)会話能力について論じた。第3節：語用論とこれまでの言語理論-Chomsky の理論と Skinner の理論および Austin の発話行為理論を中心に論じた。第4節：言語能力の語用論的アセスメント－Wetherby and Prutting (1984) などの伝達機能の評価法を紹介した。第5節：言語訓練への語用論的アプローチ－これまで行われてきた言語訓練の語用論に関連したアプローチを概観した。これら

のアプローチの共通点は，対人関係的文脈を弁別刺激とし，強化因としては般用性の高い条件性強化刺激を用いて，言語の伝達機能を獲得させようと試みる点にあった。

以上のことから，本研究では，語用論的伝達機能を評価する枠組みを検討し，自閉症児の伝達機能における問題点を明らかにした上で，それらの問題に対応する訓練技法を提案し，その臨床的効果について検討を加えることを目的とする。

第3章　自閉症児における語用論的伝達機能の評価

第1節：問題－自閉症児の伝達機能の横断的・縦断的評価が必要である。

第2節：**実験1**　1．目的：自閉症児における伝達機能のプロフィールの特徴を健常幼児のそれとの比較において明らかにする。2．方法：1)被験児：自閉症児3名，健常幼児2名。2)手続き：被験児と母親の一対一の自由遊び場面を，20分間ずつビデオテープに録画した。各伝達行為をWetherby and Prutting（1984）の伝達機能カテゴリーを用いて分類した。3．結果および考察：健常幼児では，環境的（物理的）結果事象を導く相互作用的機能（物の要求，行為の要求，抗議）と社会的結果事象を導く相互作用的機能（社会的ルーチン＜やりとり＞の要求，許可の要求，情報の要求，友好表示，差し出し，コメント＜相互作用的命名・叙述＞）の双方がともによく出現していた。自閉症児においては，社会的結果事象を導く相互作用的機能は出現しにくかった。

第3節：**実験2**　1．目的：自閉症児における伝達状態の発達的変化を，健常乳幼児のそれとの比較において明らかにする。2．方法：1)被験児：自閉症児1名，健常乳幼児1名。2)手続き：約1年間にわたって，1ヵ月または2ヵ月に1度，実験1と同じ手続きでデータを収集した。3．結果および考察：健常児においては，環境的結果事象を導く相互作用的機能はよく出現していた。社会的結果事象を導く相互作用的機能は初期から出現している友好表示を基本として，つぎに差し出し，社会的ルーチンの要求，コメントの順に階層的に発達してくるように思われた。自閉症児においては，社会的結果事象を導く相互作用的機能は，当初ほとんど出現しなかった。しかし，実験期間後半からコメント等の社会的結果事象を導く相互作用的機能が増加した。

第4章　自閉症児における伝達機能の発達検査上の特徴

第1節：問題－対象児の伝達機能を，発達段階を尺度として評価することが可能であるかどうかを検討する。

第2節：**実験＜調査＞3**　1．目的：健常乳幼児における各伝達機能の発達的特徴を，質問紙調査により明らかにする。2．方法：1)対象児：生後4カ月～41カ月の乳幼児573名。2)手続き：各項目の通過月齢を算出した。3．結果および考察：Wetherby and Prutting（1984）の自発的な相互作用的伝達機能9種類のうち6種類が抽出できた。

第3節：**実験＜調査＞4**　1．目的：自閉症児と精神遅滞児における各伝達機能の発達的特徴を，健常児の標準化資料との比較において明らかにする。2)方法：1)対象児：自閉症児5名，精神遅滞児7名，健常児6名。2)手続き：調査表への母親の解答を収集した。3．結果および考察：健常児においては，生後6ヵ月ですでに物の要求，行為の要求，抗議といった充足的伝達機能と，社会的伝達機能のうち友好表示が出現していた。その後，社会的伝達機能にはコメントと情報要求が加

わった。精神遅滞児においては，社会的伝達機能が充足的伝達機能に劣らずよく発達していた。自閉症児においては，充足的伝達機能に比べて社会的伝達機能が顕著に遅滞していた。

第５章　自閉症児における社会的相互作用的伝達機能の形成

第１節：問題－社会的相互作用的な伝達機能，特にコメント（相互作用的叙述・命名）と情報要求を形成するための方法を検討する。

第２節：**実験５**　１．目的：自閉症児における「やりとり行動」の獲得がコメントに及ぼす効果について検討する。２．方法：1)被験児：自閉症児１名。2)手続き:ボールの受け投げ行動を行動論的手法により形成する。３．結果および考察：ボールの受け投げ行動が形成され，それが笑顔や言語賞賛で維持されるようになるにつれて，コメントや友好表示が増加した。

第３節：**実験６**　１．目的：自閉症児に対して「なあに？」という情報要求発話を形成するための訓練手続きを検討する。２．方法：1)被験児：自閉症児１名。2)材料：30種類程度の絵カード，蓋つき容器10個，漢字カード多数。3)手続き：子どもが対象物を指さして「なあに？」と自発的に言いながら担当者を見る行動を，マンドーモデル法により形成する。３．結果および考察：絵カードを入れた容器条件では正反応立が順調に上昇した。しかし，漢字カードへの般化は起こらなかった。次に，漢字を貼った容器条件，漢字を貼った容器条件・漢字カード条件，漢字カード条件による訓練を順に行った。正反応率は順調に上昇していった。形成された発話は，訓練以外の場面でもみられるようになった。

第６章　自閉症児における相互作用的叙述と情報要求の機能にさら伝達的ニュアンスを加える終助詞文表現の形成。

第１節：問題－伝達的ニュアンスを加える表現を形成する試みの一例を示す。

第２節：**実験７**　１．目的：自閉症児と健常幼児における，終助詞文表現の出現状況を明らかにする。２．方法：1)被験児：自閉症児１名，健常幼児１名。2)手続き：被験児と母親の自由遊び場面をビデオテープに録画した。３．結果および考察：健常幼児は終助詞「ね」と「よ」を多く表出した。また，「かな」も数回表出した。自閉症児は「かな」を多く表出したが，「ね」や「よ」はまったく表出しなかった。

第３節：**実験８**　１．目的：相互作用的叙述が可能である自閉症児に対して終助詞文表現の訓練を行い，その手続きを検討する。２．方法：1)被験児：自閉症児１名。2)材料：紙製の小箱24個。3)手続き：菓子の入った箱か空の箱を１個ずつ黙って提示した。提示の際に，訓練者は被験児と向かい合っている条件（正反応発話は「入ってるね／からだね」）と，被験児から顔をそむけている条件（正反応は「入ってるよ／からだよ」）を設定した。３．結果および考察：どちらの条件でも「ね」文と「よ」文がほぼランダムに出現しており，被験児は両条件を弁別してはいなかった。

第４節：**実験９**　１．目的：終助詞文表現を訓練するために用いる絵画刺激が，目標の文を表出するために妥当であるかどうかを検討する。２．方法：1)被験者：一般成人10名。2)材料：「…が～（ちゃっ）たよ／の／ね」の内容を場面構成と人物の表情と動作で表現している２コマの絵各20枚（計60枚)。3)手続き：カードを１枚ずつ提示する。３．結果および考察：５名については３種の

絵カードが，２名については２種の絵カードが弁別刺激として機能していた。３名については絵カードが弁別刺激として機能していなかった。

第５節：**実験10**　１．目的：自閉症児に終助詞「よ」，「の」，「ね」を伴う伝達文を形成するための，絵画に描かれた文脈を弁別刺激として用いる訓練法を検討する。２．方法：1)被験児：自閉症児３名，健常児３名。2)材料：３種の絵カード。訓練用30枚，般化プローブ用30枚。3)手続き：正反応のときは言語賞賛とともにトークンを１コ与えた。誤反応のときはモデルを示した。３．結果および考察：自閉症児は21，28，34セッションで，般化プローブ絵画に対する正反応率が３文型ともに基準に達した。健常児は３，７，７セッションで基準に達した。訓練された終助詞文表現が日常生活場面にも般化した。

第７章　総合考察

第１節：伝達機能の発達とその行動分析的理解について述べた。第２節：伝達機能の階層性について論じた。第３節：伝達機能の発達検査的評価について考察した。第４節：コメント（相互作用的叙述）と情報要求の訓練について考察した。第５節：終助詞文表現とその他の伝達的表現の訓練に関して考察した。第６節：会話規則の評価とその訓練について論じた。第７節：研究の要約と残された問題および今後の展望について述べた。

審　査　の　要　旨

本研究は，自閉症児の言語障害における語用論的問題点を行動分析学の枠組みで整理し，治療教育的アプローチの可能性を追求しているところが高く評価されるところである。

しかし，全体としての論文の流れに統一性が欠けるところ，被験者のサンプリング，信頼性の検討など，かならずしも十分といえない点も認められる。

そうした問題点はあるにせよ，認知論的言語論と行動論的なアプローチの融合といった大変に困難なテーマに対し，調査法，実験，臨床的方法など工夫をこらして追究し，それなりの成果をあげることができたことは特筆されよう。

よって，著者は教育学博士の学位をうけるに十分な資格があるものと認定する。